

# 『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

## 霜

平成28年11月第4週放送

「霜しもをふ経れば、楓ふうよう葉あか丹し」という言葉があります。

霜を身に受けることで楓かえての葉は赤く色づくのだ、という意味になるでしょうか。禅語にも同じような言葉がありますが、これは西郷隆盛が作った五言律詩ごこんりっしの中の一節です。

ここでの「霜」は、「厳しい体験」の喩えとして用いられていると思います。

霜が紅葉こうようの色を深くするように、厳しい体験は、私たちの心を深いものにしていくのだ、というメッセージがこめられているのではないのでしょうか。

詩の作者である西郷隆盛の激動の生涯は、この言葉をより一層奥行きのあるものにしていると思います。

厳しい体験は、私たちにとってできれば避けたいものですが、人生の中で、やはりどうしても直面せざるを得ないものなのでしょう。

その体験は、人によってそれぞれ違うでしょうし、多種多様であると思いますが、誰もしもがその厳しさに震えてしまうものとしてあげられるのが「死」ではないでしょうか。

愛しい大切な人の「死」、そして自分が直面する「死」は、私たちの心に強烈な衝撃を与えるものなのでしょう。

そんな時に、私たちの力になる言葉が『法華経』ほつげきょうの中にあります。

「常懐悲感じょうえひかん 心遂醒悟しんすいしょうご」

常に死に直面したかのような、悲しみの感情をじっと心に懐いていると、心はついに目ざめる、と言った意味になるのでしょうか。

つらいけれど、悲しみの感情をみつめ、心に懐き続けること。そうしていると、あなたの心は、いつしか目ざめ、正しい教えに出会うことが出来る、と『法華経』は私たちに伝えているのだと思います。

厳しい寒さを知らせる真っ白な霜が、楓の葉の赤さを、より深いものにするように、「死」をはじめとするさまざまな厳しい体験は、それを懐き続けることで、私たちの心をより深いものにし、生きる力をつちか培うものなのです。

庭一面に降りた、霜を見つめながら、西郷隆盛の「霜を経れば、楓葉丹し」、『法華経』の「常懐悲感じょうえひかん 心遂醒悟しんすいしょうご」の言葉をかみしめてみませんか？

— 終 —